

叙事詩の宗教哲学

— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XI) —

茂木秀淳

〈Mokṣadharmā 和訳〉¹

[207章] (=D.214章, 7764-7792)

師匠は言った。

- (1) ここで私は、聖典を眼として、正しく（真理到達の）手段を語るであろう。それを認識して²行動すれば、英知ある者は³最高の境地を得るであろう。
- (2) あらゆる生き物の中で、人間（puruṣa）が最もすぐれていると言われている。人間の中では再生族が、再生族の中ではマントラを語る者が⁴（よりすぐれていると）言われている。
- (3) あらゆる生き物の中ですぐれているのは、一切を知り、一切を見、ヴェーダの真理を知り、真理の意味について確固とした境地をもつ彼のバラモンたちである。（cf. Johnston, Early Sāṃkhya, p.49）
- (4) 眼の損なわれたものが道でもろもろの困難に出会うのと同様に、知識のない者は世間で（困難に出会う）。従って、知識ある者がすぐれた者である。
- (5) ダルマ（教義）を望む者たちは、伝承に従って、それぞれの教義を崇拜する。しかし、彼等には、次の徳性なしには、（バラモンと？）共通の目的⁵はないのである。

1 本稿は『叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究(X)—』（信州大学教育学部研究紀要第92号1998年3月）に続くものである。略号などは前稿に準ずる。

なお本稿から、ニーラカントの注のみならず、プーナ校訂版の apparatus criticus に言及されているアルジュナミシュラなどの注釈も必要に応じて脚注に付することにし、その略号は、校訂本と同じものを用いることにした。すなわち、アルジュナミシュラ注は略号 Ca., ヴィドヤーサーガラ注は Cv., パラマナーンダ注は Cp. である。ニーラカントの注については、apparatus criticus に挙げられている部分については略号 Cn. をもって言及する。P. と D. の異同については、瑣末な箇所は省略した。

また、Hopkins, E.W. 教授始め可能な限り先行論文への言及も記すことにした。略号は、その都度論文冒頭に示すことにする。

Hopkins, E.W., *Yoga-technique in the Great Epic*, JAOS vol.22, pp.333-379, 1901. (略号: Hopkins [1901])

Hopkins, E.W., *Great Epic of India*, 1901 (Reprint 1978). (略号: Hopkins [Great Epic])

George C.O. Haas, *Recurrent and Parallel Passages in the Principal Upanishads and the Bhagavad-Gītā*, JAOS, vol.42 pp.1-43, 1922. (略号 (Haas [1922]))

2 P. tadvijñānāc D. tattvajñānāc

3 P. prājñāḥ D. rājan

4 P. mantravādinaḥ D. mantradarśinaḥ

5 P. tattvārthagatiniścayāḥ D. tattvārthagata-

6 arthasāmānyaṃ Ca. sāmānyaṃ samānadharmāśrayaṇaṃ / samānatvaṃ dharmasya sarvācaraṇi-atvaṃ N. arthasāmānyaṃ phalasāmānyaṃ mokṣākhyaṃ niratiśayaṃ

- (6) (その徳性とは) 言葉・身体・心の清浄さ, 忍耐, 真実, 堅固, 記憶 (である)。あらゆる教義において, (それぞれの) 教義に通じた者はこれらの徳性を知らしめている。
- (7) ブラフマチャリヤ (梵行) として伝えられているこのブラフマンの姿は, あらゆる生き物よりも⁷すぐれている。それによって, 人々は最高の境地に赴くのである。
- (8) (最高の境地では?) 特徴との結合は滅し, 身体との接触は避けられており⁸, 耳によって聞き, 眼によって見,
- (9) 舌によって味わうこと, それらは⁹見られない (parivarjitam)。理性による決断によってこそ¹⁰, ブラフマチャリヤは汚れなきものとなるのである。
- (10) 正しく振る舞うものはブラフマンの世界を得るであろう。中間の者は神々の (世界を得るであろう)。(正しさの) より少ない振舞いに住する賢者は, すぐれた再生族として生まれるのである。
- (11) ブラフマチャリヤは行なうのが非常に難しい。そこへ至る手段について, 私の言うことを聞け。(まず) 再生族は活動的にして¹¹高ぶる心を¹²制御しなくてはならない。
- (12) 若い女たちの話は¹³聞くべきではない。裸の女たちを見てはならない。時々¹⁴女たちを見ること (だけでさえ) も, ラジャス (熱情) は力弱き男どもに至るであろう¹⁵。
- (13) (女への) 愛着が生じた場合には¹⁶, クリッチャラを行なうべし。(cf.Manu 11.213) 三日間¹⁷水に入るべし。また眠りに落ちたものは心で三回罪落としの呪文 (アガマルンヤナ賛歌) を¹⁸唱えるべし。(cf.Brh. Upa 6.4.4-5)
- (14) 賢明なる人は, 知識と結びつき広がった心によって (? manasā samtatena), 内部のラジャスからなる¹⁹罪悪をこのように焼きつくすべし。
- (15) 死体の不浄さと結びつくことは²⁰清浄な行為の足枷であるのと同様に, 身体の中にいるアートマンにとっては身体が足枷であると知るべし。
- (16) 人のもろもろのラサは, 脈管の網を通して, 体風・胆汁・粘液²¹・血液・皮膚・肉・筋肉・骨, そして骨髄を²²満たしている。

7 P. sarvabhūtebhyas D. sarvadharmebhyas

8 P. charīrasparśavarjitaṃ D. chabdasparśavivarjitaṃ

9 P. jihvayā rasanāṃ yac ca tad eva D. vāksambhāṣāpravṛttaṃ yat tanmanāḥ

10 P. ca vyavasāyena D. cādhyavasiyita

11 P. sampravṛttaṃ D. sampradīptaṃ

12 P. manaḥ D. rajaḥ

13 P. kathāḥ D. kathā

14 P. kadācid D. kathamcid

15 P. durbalān āviśed D. durbalānāṃ viśed

16 P. rāgotpattaṃ D. rāgotpannaś

17 P. ahaṃsā triḥ D. mahārtiḥ Cn. mahartīḥ śukravṛddhyātyantaṃ piḍitaḥ

18 aghamaṣaṃ Cs. agharmaṣaṇaṃ / agharmaṣaṇākhyena ṛṣiṇā dṛṣṭaṃ, ṛtaṃ ca satyaṃ ca (RV.10.190) ityādikaṃ /

19 P. antarbhūtaṃ rajomayam D. antarbhūtarajomayam

20 kuṇḍapāmedhyasamyuktaṃ N. kuṇḍapeti śarīrāntargataṃ malāntraṃ tadyathā dṛḍhaṃ bandhanam evaṃ deha ātmano dṛḍhabandhanam ity arthaḥ

21 P. vātapittakaphān D. vātapittakaphād

22 P. majjāṃ caiva D. majjāṃ dehaṃ

- (17) ここで五種の感官に性質を運ぶ (pañcendriyaguṇāvahāḥ) 脈管 (dhamani) は十本であると知るべし。それ(十の脈管)によって他のより細い千の脈管が(体内に)広がっているのである。
- (18) このように、これらの脈管の川は、ラサを水としてもち、身体の海を、時にあわせて、満たしているのである。もろもろの川が海を、時にあわせて(満たすように)。
- (19) ここ心臓の真ん中にある「マナスを運ぶ (manovahā)」²³という名の1本の脈管 (śirā) が、願望より生じた男の精液をあらゆる四肢を通して放出するのである。
- (20) なぜなら、あらゆる四肢に広がっているもろもろの脈管はそれ (manovahā) に従っているからである。(たとえば) 火の性質を (taijasam guṇam) 運ぶ脈管は両眼に達しているのである。
- (21) 牛乳の中にあるバターがかき回し棒によって²⁴かき回されるのと同様に、精液は(女の)身体への願望より生じたかき回し棒によって²⁵かき回されるのである。
- (22) 夢においても同様に、心の願望より生じた熱情が²⁶生じるに従って、(女との)接触なしに生じた精液を²⁷、この者の (asya) 脈管 (manovahā) は身体から放出するのである。
- (23) 偉大な聖仙アトリは、この精液の発生を知った。(それは、ラサと脈管と願望の)三種を原因とし²⁸インドラを神格とする故に、インドリヤ (indriya 感官) と言われている²⁹。
- (24) 生き物の混合をなす精液の様子を (śukragatiṃ) 知るならば、愛着を離れ、欠点を焼きつくし、(次の)身体の発生に至ることはないであろう。
- (25) (その人は)心によってもろもろの性質の均等性に達した後、もろもろの氣息を、身体維持の行為を行う(?)³⁰脈管 (manovaha)³¹に押出して、臨終の時に解放されるのである。
- (26) (その時)心のみが輝き汚れなく清らかに広がっている³²という心の認識が生じるであろう。ここに偉大な人々の完成があるのである³³。

23 manovahā N. aśvatthapatranāḍiva dvisaptaśatādhikā / nāḍi manovahety uktaṃ yogaśāṣṭraviśāradaiḥ iti

24 khajaiḥ Ca., Cn., Cs.: khajaiḥ manthanadaṇḍaiḥ

25 dehasaṃkalpajaiḥ khajaiḥ stridarśanasparśanādibhiḥ

26 rajaḥ N. rajaḥ ṣṭrīrāgaḥ

27 P. śukram asparśajaṃ D. śukraṃ saṃkalpajaṃ

28 tribijam N. trīṇi annaraso manovahā nāḍi saṃkalpaś ceti bijāni yasya

29 このような indriya の語源解釈については、水野弘元「根 Indriya について」印仏研第14巻2号昭和41年495頁を参照。

30 P. dehakarma D. dehakarmā N. dehakarmā dehanirvāhamātrārthaṃ karma yasya bāhyapraṇṭtiśūnya ity arthaḥ この合成語については、D.の読みの方が、「身体を維持するだけの行為をする者は」と主語が明示されることになり、理解しやすい。(cf. Hopkins [1901] p.346)

31 manovaha Hopkins: *manovaham* (sic) (Hopkins [1901] p.346)

32 P. pratāyate D. prajāyate

33 P. divyam atra siddhaṃ D. nityaṃ mantrasiddhaṃ

- (27) 従って、それ（心）を損なわないように³⁴清浄な行為をなすべし。ラジャスとタマス
を捨てた後、動物の状態となることはない³⁵。
- (28) 若い時に獲得した知識は、老齢によって力は弱まる。熟した理性をもつ者は、時がた
つにつれて、精神的な力を得るのである。
- (29) 困難な道を越えるように、グナの束縛を越えて、もろもろの欠点を見るならば、その
時、それらの欠点を越えて不死を獲得するであろう。

[208章] (=D.215章, 7793-7820)

師匠は³⁶言った。

- (1) 際限のない感官の対象³⁷に執着している人々は苦しむ。しかし、執着なき偉大な自己
をもつ人々は、最高の境地に赴くのである。
- (2) 誕生・死・老齢の苦、病氣、心の疲労が³⁸充滿しているこの世界を見て、知恵ある者
は解脱に向かって努力すべし。
- (3) 言葉と心によって、(そして) 身体によって利己的なことが為されなければ
(*anahamkṛtaḥ*)、清浄となるであろう。知恵ある乞食者は、心静まり願望を離れ³⁹、
快適に振る舞うであろう。
- (4) あるいは、生き物に対する慈悲によって心の執着を見るべし。(しかし) ここでもま
た、世界は行為の結果であると認識して、無関心を⁴⁰実践すべし。
- (5) 以前に為したよき⁴¹行為、あるいは悪しき行為、それ(の結果)を人は獲得するの
である⁴²。従って、言葉と理性の行為によって⁴³、清浄な行為を為すべし。
- (6) 不殺生・真実語・あらゆる生き物に対する誠実さ・忍耐・注意深さ、これらをもつも
のは、安楽となろう。
- (7) この最高の教義を⁴⁴、あらゆる生き物に安楽をもたらし苦から引き出すものと知る者
は、真理を知り⁴⁵安楽となろう。
- (8) それゆえ、理性と結びついた心をもろもろの生き物に向けるべし。呪ってはならず、

34 P. *tadavighātāya* D. *tadabhighātāya* N. *tadabhighātāya manonāśāya* P.とD.ではマナスの扱いが
反対になる。

35 P. *tiryaggatim āpnuyāt* D. *yatheṣṭāṃ gatim āpnuyāt*

36 P. *gurur* D. *bhīṣma*

37 *duranteṣv indriyārtheṣu* Deussen: den übel endigenden Sinnendingen

38 P. *manasaḥ klamaḥ* D. *mānasaklamaḥ*

39 *nirapekṣaś* Ca., Cs.: *nirapekṣaḥ mamaṭārahitāḥ*

40 *upekṣāṃ* Ca. *yāvac chiṣyāvabodham eva kṛpāṃ kṛtvā tata upekṣayā vartitavyaṃ / paramātmā-*
cintanapratīpatvāt kṛpāyāḥ

41 P. *prāk śubhaṃ* D. *syāc chubhaṃ*

42 P. *tad upāśnute* D. *yadi vāśunte*

43 P. *vāgbuddhikarmabhiḥ* D. *vā buddhikarmabhiḥ*

44 D.はこの句の前に

tasmāt samāhitam buddhyā mano bhūteṣu dhārayet / (=P.208.8ab)
を挿入して、この句とあわせて2行詩としている。

45 P. *tattvajñāḥ* D. *sarvajñāḥ*

- 羨んでもならない。目的なきこと⁴⁶、真実でないことを思ってはならない。
- (9) 無言のヨーガ（言葉を用いないこと）の実践によって⁴⁷、心の知識は生じる⁴⁸。あるいは真実の言葉を語りたき者は⁴⁹、微妙な教義を考慮して、真実にして暴力なきそして偽りなき言葉を語るべし。
- (10) 偽りなき、激しくなく、傷つけることなく、陰口のない言葉を、ありのままにそして短く、散漫でない意識をもって語るべし。
- (11) もしも、執着をもって語るか、あるいは執着を離れて語るかするならば、（その状態は）言葉によって知られる⁵⁰。理性によって制御されていない心⁵¹によるタマスの行為は、ラジャスの状態にある (rajabhūtair) 諸器官による行為によって⁵²理解されるのである⁵³。
- (12) 彼（そのような行為を行う人）は、この世で苦を得た後、地獄へと生じるのである。それ故、心・言葉・身体によって自ら確固として振る舞うべし。
- (13) 雑多な羊の荷物が⁵⁴泥棒たちによって、悪しき方向であると⁵⁵知って運ばれるかのように、無知な人々は輪廻を運ぶのである。
- (14) この泥棒たちを⁵⁶捨てて、よき方向へ行くべきなのと同様、ラジャスとタマスの行為を捨てて、安楽を得るべし。
- (15) 疑いの余地なく願望を離れ、あらゆる所有物から解放された人は、（人から）離れて行動し、食べ物少なく、熱力を有し、感官は制御されている。
- (16) 知識によって疲労は焼かれ、ヨーガの実践を喜びとし⁵⁷、気力にあふれた人は、揺るがない心によって、かの最高の境地を獲得するのである。
- (17) 堅固さをもち、気力あふれる人は⁵⁸、必ずや理性を制御すべし。（制御された）理性によって心を制御すべし。自分の心によって対象を（制御すべし）。
- (18) 制御された感官をもち心を支配する者にとって、彼の（感官という）神々は⁵⁹歓喜し

46 abaddhaṃ Ca. abaddhaṃ asaṃbaddhaṃ nirarthakaṃ Cn. svasyāyogyam

47 P. avāgyogaprayogeṇa D. vācāmoghāprayāsenā Ca. vāgyogo bahujalpanam / tadviparitena mitavākprayogena // manojñam nirvāṇam //

48 D.はこの句の前に、

athāmoghāprayatnena mano jñānam tat pravartate /
を挿入し 9cd 句とし、P.8cd, 9ab と共に 3 行詩を作り第 9 詩節としている。

49 P. vivakṣatā vā D. vivakṣatā ca

50 P. vākprabuddho hi saṃrāgad D. vākprabaddho hi saṃsāro Ca. prāk prabuddhaḥ prathamam prabuddhaḥ virāgo bhūtvā / vākprabuddha iti kecit paṭhanti / vyācakṣate ca—prabuddham prabodhaḥ tatra vāg eva liṅgam iti / tad aśābdam asaṃgatam /

51 P. buddhyā hy agniḡṛhitena D. buddhyāpy anuḡṛhitena

52 P. karmaṇā D. karmāṇi

53 D.はこの句 (P.11ef) を 13ab としして第13詩節を三行詩にしている。

54 P. prakīrṇameṣabhāro D. -bhāraṃ

55 pratilomāṃ diśam Ca., Cs.: pratilomāṃ corasahitām eva diśam

56 P. dasyūn D. dasyuḥ

57 prayogaratih N. prayogo yogāṅgānam anuṣṭhānam tatra ratiḥ pritiṛ yasya Ca. prayogaratih prakṛṣṭayoge atyartham āsaktah /

58 ātmavān N. ātmavān buddhimān

59 devatāḥ Ca., Cp.: devatāḥ indriyāṇi / saṃprakāśante prakāśayanti (Cp. prakāśam yānti) Cs. devatāś ca tā mahadaḥamkārābhūtamātrādyābhimāninyāḥ śarīrasthitā veditavyāḥ

て輝き、彼の自在者に⁶⁰赴くのである。

- (19) それら（感官）と結びついたマナスから⁶¹（アートマンは？）ブラフマンのごとく⁶²輝き出るのである。これらすべての（感官が）除かれた時⁶³、（彼は）ブラフマンとなるにふさわしい。
- (20) あるいは、（このように）進まないかもしれない。（その場合には、）ヨーガの聖典によって⁶⁴上昇すべきである。それによって聖典からなる聖典が習慣となるもの(?)、それを行なうべし⁶⁵。
- (21) 穀粒・油粕・醱酵粥・野菜・大麦・引き割麦⁶⁶、そして根と果実や施し物を⁶⁷かわるがわる⁶⁸食べるべし。
- (22) 食事は、場所も時間もサットヴァ的と（明るいものと）決められているが⁶⁹、実践にかなう食事に⁷⁰、吟味の上従うべし。
- (23) 実践されたもの⁷¹を妨げるべきではない。ゆっくり火を大きくする⁷²かのように、増大させるべし。（実践されたものは）知識によって増大し、それから⁷³、知識は太陽のように輝くのである。
- (24) 知識を支配する無知が、三界を支配している。知識は、認識に従う時⁷⁴、無知から引き離されるのである。
- (25) （人と永遠なものとは）異なるものであるから、そして（両者は）結合しているから⁷⁵、嫉妬深い者は永遠なるものを知ることはない。この両者の⁷⁶完成を知り執着を離れた者が、解脱するのである。
- (26) 年齢を超えた者は⁷⁷、老齢と死に打ち勝ち、永遠にして不死の、そして不滅不動のブ

60 tam iṣvaraṃ N. taṃ yoginam iṣvaraṃ Deussen: zu ihrem Herrn [dem Manas]

61 P. saṃsaktamanaso D. saṃyuktamanaso

62 P. brahmavat D. brahma tat

63 P. etaiḥ cāpagataiḥ sarvair D. śanaīś cāpagate sattve

64 yogatantraīḥ Ca. yogatantraīḥ adhyātmaśāstroditair yamaniyamādibhiḥ yogatantra については Hopkins [1901] p.352,fn.1 参照。

65 P. yena tantramayaṃ tantraṃ vṛttiḥ syāt tat tad ācaret / D. yena tantrayatas tantravṛttiḥ syāt tat tad ācaret / Cv. vṛttiḥ jīvanopāyaḥ P. のこの句の意味は明瞭ではない。

66 P. kaṇapīṇyākakulmāśaśākayāvakasaktavaḥ D. kaṇakulmāśapīṇyāka-

67 P. bhakṣaṃ D. bhaikṣyaṃ

68 paryāyeṇa Ca. paryāyeṇa yathālābham eṣām ekatamena /

69 P. āhāraṃ niyataṃ D. āhāraniyamaṃ

70 P. yat pravṛtṭyanuvartakam D. tat pravṛtṭyanupūrvakam

71 pravṛttaṃ Ca. pravṛttasya jñānasya anuvartakam, noparundhyāt pratyuta vardhayet /

72 śanaīr agnim indhayet N. indhayet vardhayet

73 P. jñānendhitam tato D. jñānānvitam tathā

74 vijñānānugataṃ Cp. vijñānānugataṃ śāstrānuprāptam / atha vā vijñānena dūradarśnādināyogalabdhenānugataṃ sahitam N. vijñānaṃ buddhis tadanugataṃ

75 pṛthaktvāt saṃprayogāc ca Ca. pṛthaktvāt bhedadarśanāt / saṃprayogāt saṃprayoje yoge prakarṣāt N. pṛthaktvād iti / avasthātrayātītam api tatsaṃprayuktatvena gr̥hṇann asūyuh śāśvatam anupādhim ātmānaṃ dūṣayan taṃ na veda Deussen: Durch Isolierung und Hinbebung ohne Murren erkennt man das Ewige

76 tayor N. tayoh pṛthaktvāpṛthaktvayor Deussen: von jenen beiden [empirischem Wissen und Nicht-Wissen]

77 vayotito N. vayotitaḥ jītakālah

ラフマンに到達するのである。

[209章] (=D.216章, 7821-7841)

師匠は⁷⁸言った。

- (1) 常に汚れなき⁷⁹ブラフマチャリヤを行なおうと望む者は、夢の欠点を観察し、睡眠を完全に放棄せねばならぬ。
- (2) なぜならば個我 (dehin) は、夢の中では、ラジャスとタマスに支配され、他の身体を得たかのごとく、記憶をなくして⁸⁰振る舞うからである。
- (3) 探求心のため、知識の実修のために⁸¹途切れなく (anantaram) 起きている者は⁸²、認識に専心するがゆえに、眠ることなく⁸³常に起きているのである⁸⁴。
- (4) この点について、夢の中で対象を享受するかに見える者は一体いかなる存在か、感官が働きを失っているのに、個我 (dehin) が身体をもつかのように存在するのはなぜか、という疑問がある。
- (5) この点について答える。ヨーガを自在にするハリが認識したことに従って、偉大な聖仙たちは適切に (以下のように) 述べている。
- (6) 賢者たちは、感官の疲労によって夢はすべての人に生じる、と言った。しかし、マナス (心) の働きが失われることによって⁸⁵、さまざまに (夢を) 見るのである⁸⁶、とも言った。
- (7) 結果に執着する心をもつ者には⁸⁷、起きている時、意志が存在する。夢の中で、望みを自由にすることがあるとしても、それはそのように心に存在するからである。
- (8) 欲望を本性とする者は、無数の輪廻の中でそれ (願望) を⁸⁸獲得するであろう。一切は心の中に置かれている、と彼の最高の人知ったのである。
- (9) それぞれの行為は⁸⁹、もろもろのグナによっても影響されていると (彼の人は) 認識している⁹⁰。行為によって心 (manas) は形成され、(心に) 存在するものが(?)⁹¹それぞれ (の行為) を (夢の中で) 告げるのである⁹²。

78 P. gurur D. bhīṣma

79 niṣkalmaṣaṃ Ca. niṣkalmaṣaṃ, antarāyānupahatam Cn. niṣkāmam Cs. rāgānupahatam

80 P. apagatasṃṛṭṭiḥ D. apagatasṃṛṭṭhaḥ

81 jñānābhyāsād Ca. jñānābhyāsād iti lyablope pañcami / tena jñānābhyāsam uddīśya jāgarataḥ /

82 P. jāgrato D. jāgaraṇaṃ

83 anīṣaṃ Cv. anīṣaṃ niśābhāvo yathā bhavati tathā sadā jāgarti

84 P. jāgaraty D. sa jāgarty

85 P. tu pralīnatvāt D. tv apralīnatvāt 感官は疲労するが、マナスの働きが残っていると読む D.の方が、夢の出現の説明として適当と思われる。

86 nidarśanaṃ N. nidarśanaṃ dṛṣṭāntaḥ /

87 P. kāryavyāsaktamanasaḥ D. kārye vyakta-

88 tat N. tat svapnādyaiśvaryaṃ

89 P. yad yat tat karma D. yady etat karmaṇā

90 P. jānāty upaṣṭhitaṃ D. cāpy upaṣṭhitam

91 bhūtāni N. bhūtāni sūkṣmāṇi

92 tat tac chāṃ santi N. tat tac chaṃsanti taṃ taṃ sṛyādyākāraṃ svapne nivedayantīty arthaḥ

- (10) 従って、ラジャスのタマスのなもろもろのグナがそれ（心）に近づくのである⁹³。あるいは、場合に応じて直接的結果を生じる⁹⁴サットヴァ的なグナも（心に近づくのである）。
- (11) それゆえ、ラジャスとタマスより⁹⁵生じる（心の）状態によって、体風・胆汁・粘液より生じる脈絡のないもの（*asambaddhān*）を（夢で）見るのである⁹⁶。それもまた（現実のことに）合致しない⁹⁷、と言われている。
- (12) （人が）静まった感官によって考える精神的なもののそれぞれを、興奮した夢の中でも心の眼は見るのである⁹⁸。
- (13) 心は、あらゆる生き物の中に行き渡り⁹⁹、障壁なきものとして存在している¹⁰⁰。身体という心の中に隠された戸を入れて(?)精神的なものは¹⁰¹、
- (14) そこにおいて、あるもの・ないもの・あらわれていないものを¹⁰²夢に見るのである。そのそれぞれを、（賢者たちは、）一切の生き物の本性にある大我の性質である、と知っている。
- (15) 願望（の力）から、心によって自在性の性質を獲得しようと願う者は、それをアートルマンの威光によって（獲得されると）知るべし。一切の神格は¹⁰³アートルマンの中にいるのであるから。
- (16) 同様に、太陽のごとく暗闇の彼方でタパスを備えた者、（そして）三界の原因である個我は¹⁰⁴、苦行（*tapas*）によってかの大自在者に（到達するのである）¹⁰⁵。
- (17) なぜならば、熱力（*tapas*）は神々によって支配され、熱力を破壊する暗闇（*tamas*）は魔族によって（支配されているからである）。このように、（性質は）神々と魔族によって隠されているのであり、それ（を知ること）が知識の特徴である、と言われている。

93 P. *upavartante* D. *upasarpanti*

94 *ānantaryaguṇodayaḥ* Cn. *ānantaryaphalodayam*, *anantaram eva sukhādyudayo yathā syāt tathā samupasarpanti* Cs. *ānantaryaphalodayaḥ vilambitaphalodayaḥ* / (Cs.は解釈は通常の意味の反対に解している。いずれにせよ、意味は明瞭ではない。)

95 P. *rajastamobhavair* D. *rajastamogatair*

96 P. *paśyaty asambaddhān* D. *paśyanty asambuddhyā*

97 P. *durānvayam* D. *duratyayam* Ca. *durānvayaṃ viparītapahalam* Cn. *duratyayam*, *prāgvāsānā-prābalyād yogaṃ vinā aparīhāryam* Cs. *prabuddhena kathayitum aśakyam*

98 P. *manodṛṣṭir nirīkṣate* D. *mano hṛṣyan nirīkṣate*

99 *vyāpakam* Ca. *vyāpakatayā mūrtatve 'py apratighlakṣaṇayā avyāhatagatitvāt* Cn. *vyāpakam upādānatvāt / apratighaṃ pratighātaśūnyam*

100 D.はこの句の後に、次の句を挿入して、第13詩節としている。P.のcd句は、第14詩節のab句となり、第14詩節は三行詩となっている。

ātmaprabhāvāt taṃ vidyāt sarvā hy ātmani devatāḥ /

101 P. *mānasam* D. *mānuṣam*

102 P. *yat tat* D. *yad yat*

103 *devatāḥ* Cv. *devatāḥ indriyāṇi*

104 *trailokyaprakṛtir dehī* Cv. *trailokyaprakṛtiṃ trailokyakāraṇam* N. *tatrobhayavidhabrahma-bhāvaṃ dehina āha trailokyeti / dehī jīvas trailokyaprakṛtiḥ kāraṇaṃ brahmety arthaḥ* Deussen: die alle drei Welten erschaffende Seele

105 P. *tapasā taṃ maheśvaram* D. *tamaso 'nte maheśvaraḥ*

- (18) サットヴァとラジャスとタマスと、神々と魔族の性質を人々は知っている。神々の性質はサットヴァ、他の二つは魔族的の性質であると知るべし。
- (19) ブラフマンは、最高にして、不死であり、光輝であり不滅であると知るべし¹⁰⁶。高められた¹⁰⁷自己をもって（このように）知る者は、最高の境地に赴くのである。
- (20) 知識の眼によっては、原因をもつものまでは述べることはできる。しかし、感官の制御によって¹⁰⁸未顕現の¹⁰⁹ブラフマンを知ることができるのである。

[210章] (=D.217章, 7842-7880)

師匠は¹¹⁰言った。

- (1) 四種のもを¹¹¹知らない者、そして顕現と未顕現という¹¹²最高の聖仙が達した¹¹³真理を知らない者は、最高のダルマを¹¹⁴知らない者である。
- (2) 顕現したものは死に向かっており、未顕現のものは不死の場所であると知るべし。ナーラーヤナ仙はかつて、活動を特徴とするダルマを語った。
- (3) 動くもの動かぬものという三界のもの一切はここ（活動を特徴とするダルマ）において存在している。これに対し、停止を特徴とするダルマは、未顕現にして永遠なるブラフマンである。
- (4) するとプラジャーパティは活動を特徴とするダルマを語った。活動とは再び生じることであり、停止が最高の境地である。
- (5) 停止（のダルマ）を最高のものとし、知識の真実を専らとし、常に善悪を観察する聖者は、その最高の境地に至るのである。
- (6) このように、これら未顕現のものとプルシャの両者が認識されねばならない。未顕現のものとプルシャとは別のものは、より大きい¹¹⁵。
- (7) 賢者は特にその相違を観察すべし。この両者は、始まりと終わりが無い¹¹⁶。またこの両者は、目印がないのである¹¹⁷。

106 P. vedyam D. jñānam

107 bhāvitātmanas C. bhāvitātmano dhyānaśaṅskṛtātmanaḥ Cs. tapasā śuddhabuddhayaḥ

108 pratyāhāreṇa vā Cp. pratyāhāreṇa bāhyaviśayād uparateṣv indriyeṣu Cs. pratyāhāreṇa yogena Cv. pratyāhāreṇa viśayebhyo nivṛtṭyā

109 P. avyaktaṃ D. akṣaraṃ

110 P. gurur D. bhiṣma

111 catuṣṭayam Ca. catuṣṭayaṃ sattvarajaṣṭamāṃsi ātmā ceti Cn. catuṣṭayaṃ pūrvoktaṃ dṛṣṭānta-bhūtaṃ svapnasuptyākhyam dvayam, dārṣṭāntikaṃ ca saḡaṇanirguṇabrahmahāvākhyam dvayam iti catuṣṭayam Cp. catuṣṭayaṃ guṇapuruṣadehaprakṛtīrūpam Cv. catuṣṭayaṃ veda-catūṣṭayam

112 P. vyaktāvyakte D. vyaktāvyaktaṃ

113 P. saṃprāptaṃ D. saṃproktaṃ

114 P. dharmam D. brahma

115 mahattaram N. mahattaram īśvaram Duessen: das höchste Brahman

116 anādyantāv ubhāv この表現と Bhagavad Gītā 13.19b anādī ubhāv api との類似は、Haas によって指摘されている。(Haas [1922] No.808, p.42)

117 aliṅgau Ca., Cn.: aliṅgau mānāntarāviśayau Cs. aśarirau

- (8) 両者は永遠で微細であり¹¹⁸, そして大きなものよりさらに大きいのである。両者にはこのような共通性があり, また別に相違がある。
- (9) 知田者の特徴は¹¹⁹, 創造の性質をもち三種の存在からなる¹²⁰根本原質とは反対であると知るべし。
- (10) (知田者の特徴は,) 根本原質の変異物の見者であり性質に伴われていないことである。これら二つのプルシャは, 目印がないために把握できず, また(両者は) 集合したものではない¹²¹。
- (11) (対象とプルシャとの) 結合による目印の発生は, (過去の) 行為より生じる¹²²ものと捉えられる¹²³。行為を引き起こす感官によって行為者は, それぞれの行為を行なう。彼(行為者)は言葉と名称によって述べられ, (すると)「私は誰か, これはまた誰か」と問うのである。
- (12) ターバンを巻いている者は, 三種の¹²⁴衣服によって(頭が)覆われているのと同様に, 個我(dehin)は, サットヴァ的・ラジャ斯的・タマ斯的なものによって覆われている。
- (13) 従って, 四種のもは, これらの原因によって覆われている, と知るべし(?)。(このことを)正しくありのままに知るならば¹²⁵, 最後の時に¹²⁶迷うことはない。
- (14) 神聖にして吉祥なるブラフマンに¹²⁷達することを願う者は, 言葉と心によって¹²⁸清浄となり, 身体に関する厳格な規定に基づいて, 汚れなき苦行(tapas)を行なうべし。
- (15) 三界は内部で輝く熱力によって満たされている。太陽と月は, 熱力によって天に輝いているのである。
- (16) 苦行(tapas)の熱が¹²⁹知識であり, 知識は世間でタバスと呼ばれているのである。ラジャスとタマスを破壊する行為, それが熱力の固有の目印である。
- (17) ブラフマチャリヤと不殺生は, 身体に関するタバスと言われ, 言葉と心の制御は, 同様に¹³⁰精神的なタバスと言われている。
- (18) 規定を知る再生族のために, 摂取される食べ物は制限される。食事の制御によって, このラジャスより生じる悪は滅するのである¹³¹。

118 P. nityau sūkṣmatarau D. nityāv avicalau cf.Hopkins [Great Epic] pp.134,fn.1,182

119 P. ca lakṣaṇam D. svalakṣaṇam

120 P. trividhasattvayā D. triḡuṇadharmayā cf.Hopkins [Great Epic] p.117,fn.1

121 P. asaṃhitau D. asaṃhatau

122 P. karmajā D. karmaṇā

123 P. ḡṛhyate yayā D. ḡṛhyate yathā

124 tribhiḥ Ca. tribhiḥ paridhānāc chādanoṣṇisaiḥ Cn. tribhiḥ sthūlasūkṣmakāraṇadehaiḥ Cp. paridheyottariyoṣṇisaiḥ

125 yathāsaṃjñō N. yathāsaṃjñāḥ uktavidhaṃ jñānaṃ anatikrāntaḥ

126 antākale N. antākāle siddhāntakāle

127 brahma Ca. divyāṃ lakṣmim, brahmaikatvam Cn. divyāṃ divi hārdākāse brahmaṇi bhavām

128 P. brahma vānmanasā D. varṣmavāvān manasā

129 P. pratāpas D. prakāśas

130 P. sāmyaṃ D. saṃyaḥ

131 P. naśyati D. śāmyati

- (19) この者の感官は、対象に対して嫌悪に至る。それゆえ、この世界で必要がある限りの量を¹³²取るべし。
- (20) 苦しみを離れた者は、臨終に際して精力が優勢となるので¹³³、静かに（知識を）獲得するであろう（? *kuryād*）。このように、集中した心によって、その（解脱への）知識は生じるのである¹³⁴。
- (21) ラジャス（の優勢）によって、この個我は身体をもちつつ、音声（が虚空を彷徨うか）のように、彷徨うであろう¹³⁵。（しかし）結果によって惑わされない考えをもつ者は、離欲によって、根本原質にとどまるのである。（そして）身体を離れて以後注意深くすれば（?）¹³⁶、（その時こそ）最後の身体から解放されるのである¹³⁷。
- (22) 生き物の創造、そして消滅は、常に¹³⁸原因と結びついている。しかし、最高者の観念の創造においては¹³⁹、常に（この規則を?）超えることはない（?）¹⁴⁰。
- (23) 世界の終末と創造を知り¹⁴¹、転倒なく（?）¹⁴²座し、堅固に¹⁴³身体を保持し、理性によって把握された心をもつ人々は¹⁴⁴、もろもろの（感官の）場所から離れつつ、微細な故にそれら（氣息や感官）を冥想するのである¹⁴⁵。
- (24) それが伝承に従うすべてである（?）。理性によっては、まさにそれこそが知られないのである¹⁴⁶。（そのために）身体の終りに、ある人々は、自己を清め（欲望などの）より所なく¹⁴⁷専心し、ある人々は、心の保持によって（*dhāraṇayā*）集中し、ある人々は有（*sattā*）を崇拝するのである¹⁴⁸。

132 *yāvad atra Cs. yāvad atra prayojanaṃ, yāvatā śariradhāraṇam*

133 *P. vayotkarṣāc D. balotkarṣāc*

134 *P. jñānaṃ tad utpadyate D. jñānaṃ yad utpadyate N. tat jñānaṃ antakāle balotkarṣāt kuryāt yaj jñānaṃ yogayuktena manasā śanaiḥ upapadyate ity anvayaḥ*

135 *P. rajasā cāpy ayaṃ dehi dehavān śabdavac caret D. rajovarjyo 'py ayaṃ dehi Ca. rajaseti, cakārāt tamasā ceti bodbhavyam / yadi rajasa udrekāt tattvajñānaṃ nodetuṃ labhate / śabdavad vedavad yathā vidhir bhavati tathā tvaret (? caret) / śabdavat* については Hopkins [1922] p.346 参照。

136 *ā dehād apramādāc ca N. ā dehād dehapātāv adhi apramādād anavadhānatvādyahāvāt*

137 第21詩節から第25詩節に関しては、Hopkins [Great Epic] p.160,fn.1 参照。

138 *P. sadotsargo D. sadā sargo*

139 *parapratyayasarge Cn. parapratyaysarge śuddhabrahmasākṣātkārodaye Cv. paramātma-jñānodaye*

140 *P. niyataṃ nātivartate D. niyatir nānuvartate D.*の「この制限は当てはまらない」という方が、わかりやすい。

141 *P. bhāvāntaprabhavaprajñā D. bhāvāntaprabhavaprajñā*

142 *viparyayaṃ Deussen: unentwegt (aviparyayam)*

143 *dhṛtyā Cn. dhṛtyā āsanādyapracutyā*

144 *P. buddhisamkṣiptamānasāḥ D. -samkṣiptacetasaḥ N. buddhyā samkṣiptaṃ viṣayebhyaḥ praty-āhṛtaṃ ceto yas te*

145 *sūkṣmatvāt tān upāsate N. sūkṣmatvāt annamayāpekṣayā tān prāṇendriyādin upāsate ātmatvena cintayanti*

146 *P. yathāgamaṃ ca tat sarvaṃ buddhyā tan naiva budhyate D. yathāgamaṃ gatvā vai buddhyā tatraiva buddhyate*

147 *P. nirāśrayaḥ D. nirāśrayam Cp. nirāśraya iti pāṭhe kāmārthādyanāśrayaḥ /*

148 *P. yukto dhāraṇayā kaścit sattvaṃ kecid upāsate D. yuktaṃ dhāraṇayā samyakṣataḥ kecid upāsate*

- (25) (彼らは,) 雷光と呼ばれる不滅の最高の神に至るであろう。(cf. Vāj. saṃ. 32.2, Kena Up. 3.29) なぜならば, 臨終に際して瞑想する者は¹⁴⁹, 熱力によって罪を焼き尽くしているのであるから。
- (26) これら偉大な人々はすべて最高の境地に赴く。彼等の微細な特徴を (viśeṣaṇam) 聖典を眼として観察すべし。
- (27) (未顕現の?) 最高の身体は¹⁵⁰, 解放され, 住処なく, 虚空のごとく¹⁵¹心の保持に専心した心をもつと知るべし。
- (28) 死すべき世界から解放され, 知識と結びついた心をもった¹⁵²汚れなき人々は, ブラフマンとなって最高の境地に赴くのである。
- (29) 欠点なき不動の知識が生じた人々は, 清浄となり, 力に応じて, もろもろの最高の世界に赴くのである。
- (30) 至尊にして不生, 未顕現と呼ばれる, 神聖なヴィシュヌに, 清浄な知識に満足し, 願望なき人々は実際に赴くのである。
- (31) この揺るぎなき人々は, ハリが自己に在ることを認識して, (この世界に再び) 戻ることはない。その最高の場所に達して, 不滅・不動を喜ぶのである。
- (32) このような認識が存在する, そして存在しないという限り¹⁵³, 渴愛に縛られたすべての世界は, ろくろのごとく回転するのである。
- (33) 蓮の葉の端にある糸は, 蓮の葉のあらゆるところにあるのと同様に, 始めも終わりもない渴愛の糸は常に体の中にある。
- (34) 織物師が, 針で糸を布に入れるのと同様に, 輪廻の糸は渴愛の針によって止められているのである。(cf. Hopkins [Great Epic] p.161, fn.1)
- (35) 変異したもの, 根本原質そして恒常なるプルシャを, ありのままに認識する人は, 渴愛を離れ解脱するのである。
- (36) このように, 聖仙ナーラーヤナは, 生き物に対する同情のために, 不死の光輝を, 世界の幸福を¹⁵⁴詠ったのである。

(1998年4月30日 受理)

149 P. upāsannās D. upāsante

150 P. dehaṃ tu D. dehāntaṃ Cn. dehāntam avyaktalayādhiṣṭānam / dehaṃ tu iti pāṭhe avyaktam eva Cp. dehaṃ ... vimuktaṃ jīvanmuktaṃ /

151 antarikṣād anyataraṃ Ca. antarikṣād anyataram, ākāśavad avaṣṭhitam Cn. antarikṣaṃ hār-dākāśaḥ / Deussen: als von Luftraum noch verschieden [an Grösse]

152 P. vidyāsaṃyuktamānasāḥ D. vidyāsaṃsaktacetasaḥ

153 asti ca nāsti ca Ca. asti sattayā nirucyate / etad eva ca nāsti anyavyāvṛttimukhena asthūlam aṅv ityādīnā vedānteṣūcyate Cn. asti ca nāsti cety anirvacaniyam ity uktam Cs. īśvarānuḡhitānām asti tato 'nyeṣāṃ nāsti

154 P. jagato hitaṃ D. jagato gatiḥ